

平成30年度 調布市立第二小学校 学校評価報告書

様式1

領域	自己評価結果の概要	学校関係者評価結果の概要	次年度への改善策	次年度優先順位
学力向上	<ul style="list-style-type: none"> 「二小スタンダード」を徹底し、授業規律を身に付けようとしているということに関して保護者の満足度は86.0%(昨年度80.6%一昨年度77.3%)と年々満足度が増すとともに「二小スタンダード」への取り組みに関しては保護者の理解が進んでいると考える。 小グループでの話し合いで考えを交流する活動は少しずつ定着してきている。 個に応じた指導に関する保護者の満足度は59.1%と大変低くなっている。2学期途中から算数の習熟度別少人数指導が展開ができていないことが原因している。 「わからない」との回答が21%あったことから、取り組みについて周知する方法を検討し、広報していく。 「東京ベーシック・ドリル」は、1学期から取り組み、3学期中に全員が習得の予定である。 	<p>教員やクラスそれぞれのカラーや雰囲気を大切にしつつも、学校として最低ライン身に付けるべきことを明確にすることは大事であると考えている。引き続き、更なる定着率と保護者の理解の向上に努めていただきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「二小スタンダード」について全教員による共通理解を十分に図り、話の聞き方、発言の仕方等を統一的に確立、定着させる。 自分の考えをしっかりとらせる指導を徹底する。自分の考えをもった上で、小グループや全体での話し合い活動を取り入れ、自分の考えを分かりやすく伝えたり、友達の考えと比べたりする授業を創造し、実践する。 	B
健全育成	<ul style="list-style-type: none"> あいさつ運動はPTA・地域関係者と連携し、予定通り実施することができた。 たてわり活動などを通じた豊かな心の育成に関する保護者アンケートの満足度は、94.6%と非常によい評価を得ている。 フレンドリータイムは、年間指導計画通り、各学年11時間指導し、対人関係力の育成を図ることができた。 	<p>「あいさつ」は子供に無理強いすることではなく、大人から積極的に子供に向けて行うことで自然と影響を受けていくことであると思う。あいさつ運動の期間だけでなく、日ごろから大人が意識的に行うようにするべきと考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 人権尊重教育推進校として、「一人一人が自分が大切にされていると感じられる人権教育」を推進する。校内研究(道徳)を中心に、全教育活動を通じて相互の良さや自分の長所短所を認め大切にすることができるよう、各教科等の指導と人権課題の関連を明らかにする。 あいさつ運動は引き続き重点項目として取り組む。児童会活動での取組も視野に入れていく。 たてわり班活動・フレンドリータイムは、特色ある教育活動として継続して取り組んでいく。 	A
健全育成	<ul style="list-style-type: none"> 「いじめ・心の状態調査」の実施と学級担任等の観察により、いじめの未然防止、軽度での解決を図ることができた。 担任が交代した3年2組では、スクールカウンセラーによる全員面接を実施すると共に、希望する保護者と個人面談を行い、心のケアを行った。 スクールカウンセラーと連携して、児童の心の状態を探ることができた。 	<p>「いじめ」は、いじめを受けた側だけのケアにとどまらず、いじめた側の心理状態や家庭環境をはじめとする子供を取り巻く環境なども探るべきと考える。双方を理解することが根本的な解決の糸口になるのではないかと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「いじめ、心の状態調査」については継続して、年3回実施するとともに、いじめの根絶に向けて、学校だより等で家庭・地域に対して啓発及び協力を依頼していく。 5年生児童は全員、次年度も引き続きスクールカウンセラーとの面接を行う。 教員の人権感覚を高めるための研修会を計画的に実施する。 	A
健康・体づくり	<ul style="list-style-type: none"> 健康づくりの取組についての保護者アンケートの満足度は94.5%と良好であった。 PTA実行委員会で、8月の学校保健委員会で行った本校児童の健康状態についての内容を養護教諭が報告した。 夏季休業明けに、「朝の生活しらべ」を行った。その結果を受け、発育測定時の保健指導をもとに取り組んだ内容を保健だよりで知らせ、家庭生活の中での健康づくりの大切さを啓発することができた。 	<p>健康への意識は、学校の指導だけでなく、家庭への呼びかけ啓蒙も不可欠であると考えている。引き続き「保健だより」などを通して啓発に取り組んでいただきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 家庭の協力を得て、「朝の生活しらべ」は引き続き実施する。 学校保健委員会は多くの保護者が参加しやすいよう既存の会合と統合させて開催できないかを検討し、実現させていく。 	C
健康・体づくり	<ul style="list-style-type: none"> 体力向上の取組に関する保護者アンケートの満足度は、80.5%であり、課題である。 体力・運動能力調査では、男子が19項目女子が26項目調布市の平均を上回った。(昨年度男子19項目女子25項目、一昨年度男子13項目女子14項目) コーディネーション・トレーニング地域拠点校としての研修会、説明会を行った。また、毎週の児童朝会後に全校でトレーニングを行った。 走り方・投げ方に関するスポーツ教室を実施した。 マラソン集会をスタートにマラソンカードに取り組んだ。 	<p>子供の体力低下は長年の課題であり、学校体育だけで補うことには限界があると考えている。学校の休み時間を含め、放課後の遊び時間(体を使った)の確保や過ごし方の見直しも必要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 年間を通じた体力向上の取り組みを検討し、取り組んでいく。コーディネーション・トレーニングは、継続して体育の時間に取り入れていく。 一流のアスリートを招請するスポーツ教室については、年間を通してバランスよく取り組んでいく。また、保護者の参観を呼びかけたり、内容の広報を充実したりするなどした、保護者にもオリンピック・パラリンピック教育の意義を啓発していく。 	A
保護者・地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> 情報発信に関する保護者アンケートの満足度は86.5%であった。ホームページでの情報発信により、学校生活の様子を伝えることができています。 学校を公開する機会に関する保護者アンケートの満足度は96.8%と非常に良好である。 	<p>特に、スマートフォンの普及で手軽にホームページを見られる環境が多くの人に整っているため、引き続き可能な限り情報の更新に努めていただきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 速報性かつ柔軟性のあるホームページを目指し、より一層開かれた学校づくりを推進する。 次年度も本校の特色である「たてわり班活動」の参観ができるように学校公開日を計画する。 	B
保護者・地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> 地域との連携に関する保護者アンケートの満足度81.4%であった。現在、地域のスーパーマーケットや事業所、消防署の見学を行っている。また、お箏教室や落語教室、茶道教室など地域の人材を活用している。 学校評議員会を年3回開催し、学校運営について意見を求めることができた。また、必要に応じて学校の状況を説明し、取組の方向性について助言をいただいた。 	<p>二小は特に、地域とのつながりが多い小学校であると思われるし、長所でもあると考える。今後も、更にその特徴をプラスに生かしていただきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教員の地域行事への参加を促し、地域との連携を更に強化していく。 地域や保護者の方々からの協力を得て、芝生を介在にした一層の協力体制を構築する。 	B
特色ある教育活動	<ul style="list-style-type: none"> 9月にお箏教室を3・4年生に実施し、10月に取り組み内容を保護者に披露することができた。 10月に4年生を対象に落語教室を実施した。 12月の音楽発表会では、ゲストに招いたマリンバ奏者の一流の演奏に触れることができた。 茶道教室を6年生対象に、折り紙教室を2・3年生対象に2月に実施した。 	<p>伝統芸能などは日ごろなかなか触れる機会が無いので、学校がそのような機会を与えることは十分に意義があると思う。他校とも連携して、人材の人脈を広げてよりゲストの選択の幅を広げられるとまお良い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 演奏家、落語家、芸術家(茶道)は予算の許す範囲で引き続き招き、日本文化理解を深められるようにする。 	B
特色ある教育活動	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育コーディネーター、特別支援教室専門員、スクールサポーターが協議し、個別の取り出し指導を含めた特別な支援を要する児童への支援体制を整えることができた。 巡回指導で来校する校内通級教室などいりの指導者や巡回相談での専門家からの助言を生かし、一人一人に合った支援の方法を模索することができた。 ブラインドサッカー体験や車椅子バスケット教室、ポッチャ体験、副籍交流等を通して障害者理解を深め、パラリンピックへの関心も高めることができた。 	<p>特別支援は、現状の体制や取組を維持しつつ、就学前の施設(幼稚園、保育所)との連携もより強くし、就学してくる子供の情報共有をより細かにすることも大切である。また、就学後も必要に応じて就学前の施設(幼稚園、保育所)に情報提供など協力を求めることも有効である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育コーディネーターを中心に、関係諸機関との連携を大切にしながら、課題となっている適正就学につなげるようにする。 通常の学級に見られる軽度発達障害について、保護者を対象とした研修会を、既存の会合と統合させて開催できないかを検討し、実現させていく。 	B